

学校だより

# プラタナス



令和3年3月12日(金)

市川市立市川小学校

No.43 校長 蜂須賀 久幸

<https://ichikawa-school.ed.jp/ichikawa-sho>

**話しているだけで幸せな気分になれる、そんな人でありたい**



校長室に絵本や文庫本を閲覧していますが、6年生数人が借りては返しに来てくれます。『マスカレードホテル』の3部作も読みやすいようです。この6年生も、あと1週間で卒業です。

この作品は映画化され、テレビで放映しましたし、宝塚でも上演されたようです。この原作の中に、私の

好きな表現(文章)が2つあります。その一つが、“男性の話術は魔法のようだった。話しているだけで、幸せな気分になっていく。それが彼らの仕事なのだ。何という素敵な職業だろうと思った。”という部分です。これは、主人公の山岸尚美が、大学受験で上京し、「ホテル・コルテシア東京」に宿泊した際に、藤木副支配人(当時)の語り口から感じた職業観であり人物観です。

もう一つが、“さっき君は、初めて訪れたお客様にも心を開いていただけるにはどうしたらいいかを今後の課題にしたいといったね。この人なら秘密を打ち明けても大丈夫だ、と信用してもらえらることも、ホテルマンとしては大切なことだ。”という文章。こちらは、事件が解決したあと、藤木総支配人からフロントクラークの山岸尚美に、柔らかくかつ力強く投げかけられたメッセージです。

この2つが気になった理由は、おそらく私自身「話をしているだけで幸せな気分になれる人」「この人なら秘密を打ち明けても大丈夫だと信用してもらえらる人」でありたいと願うからだと思います。また、子供たちや保護者の方からそう思っただけの教職員が集う学校にしたいという気持ちと何かしら通ずるものがあつたからかもしれません。

“お客様がルールブックなのです。”という会話も登場しますが、ホテルはそう思わせるようなサービスを提供する快適な場所ではなくてはなりません。さすがに、学校では「子供(保護者)がルールブック」というわけにはいきません。しかし、一人一人違う子供たちの特性に応じた、丁寧できめ細かな対応を心がけるといった点では似ているものがあります。子育ての基盤も、家族が安心して寛げる家庭にあるのだと思います。

市川小学校の子供たちの幸せのために、何が必要で、いま何が足りないのか、コロナ禍の不安な時期だからこそ学校と家庭、地域が一緒になって考えていく必要があると思います。

進学・進級を目前に控え、不安や心配なことがあれば、各学級担任あるいは市川小コンシェルジュ(?)へお申し出ください。

1週間後に卒業を控えた6年生には、山岸さんの藤木総支配人との出会いのように、人生に影響を与えるような人との出会い、標(しるべ)が待っています。『一期一会』は、「この機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会いであるということを得て、誠意を尽くす心構えを意味する」茶道に由来する言葉です。そんな気持ち・出会いを私たちも大事にしたいと思っています。

## その言動は“自分にとって、みんなにとって”どうか？

まず、二月四日の読売新聞に掲載された、『ハラスメント』乱発に疑問」と題された柏市の中学生（14）の投書を紹介します。

「〇〇ハラスメント」という言葉をよく目にする。嫌なことに対し、ためらわずに声を上げられるようになったのは良いことだ。だが、むやみにハラスメントに認定することには反対だ。嫌がらせと思うかどうかは、人によって差があるからだ。例えば、異性から「髪の毛を切ったの」と言われ、セクハラだと感じたとしても、言った方は喜ぶだろうと善意で発言したのかもしれない。嫌なことを全てハラスメントと呼んで相手を責めることは、自己の意見を相手に押し付けているとも言える。相手を尊重し、双方が気持ちよく過ごせるように互いに心を配るべきだ。

NHK大河ドラマ『青天を衝け』は、渋沢栄一氏の少年時代から始まりました。第一話で、栄一少年に言った母親の言葉が頭に残っています。

「あなたが嬉しいだけでなく、みんなが嬉しいのが一番だよ」という言葉です。その後の栄一の言動の端々に、この言葉が生きています。

自分にとって都合がよいか否かが判断基準になってしまう危険性を中学生が問題提起をしています。今年度が終わろうとする今こそ、自分を客観的に振り返ってみる必要があるように感じます。先の投書を、三月の放送朝会のパワーポイント資料に入れておきました。使ってくれた学級もあつたようで嬉しく思います。

## 市川市防災教育の日



市川市が、東日本大震災が発生した3月11日を「防災教育の日」に制定したのは2013年4月のことで、目的は次のとおりです。



- (1) 東日本大震災による犠牲者を追悼するとともに、震災の被害、教訓を語り継ぐことにより、自然災害の脅威に対する危機感の風化を防ぎ、防災意識の高揚を図る。
- (2) 災害時における避難行動等について、適切な判断力、対応力を養う。

最大16m超の津波に襲われた宮古市の内陸では、元の場所から500m近く流された巨石(6.5×2.5×2.5m、140t)が、今なお津波の威力や速さを思い起こさせます。市川駅周辺は、これほどの津波の心配はなさそうですが、江戸川や真間川に囲まれ、洪水などによる災害が予想されます。「災害時は、思ったように動けない」といいます。「備えあれば憂いなし」が言葉だけにならないように、この機会に家庭で話し合ってくださいようお願いします。



市川小でも昨日、放送による防災集会をパワーポイントで資料を提示しながら実施しました。記憶に新しい2月13日夜の福島沖地震や東日本大震災、阪神淡路大震災の状況を伝えながら、身近にある危険を考えさせました。平穏な日常生活を奪われる怖さだけでなく、災害が発生した時の対応についても想起できるように努めました。また、正しい情報による判断の大切さを伝え、黙とうを捧げました。とらえ方は発達段階によって異なりますので、各学級で補足をしました。



### 全国小・中学校・PTA新聞コンクール

★佳作 「すずかけ新聞」市川小 新聞委員会

★努力賞 「学習新聞・国語&社会科」市川小 3年2組